

ISSN 2186 – 3989

国際学会報告

Boston University Conference on Language Development 44

— (邦題) 第44回ボストン大学言語発達学会 —

2019年11月7日(木)～11月10日(日) ボストン(アメリカ)

国際コミュニケーション学部 島田 博行

北陸大学紀要  
第49号(2020年9月)抜刷

## 国際学会報告

### Boston University Conference on Language Development 44

- (邦題) 第 44 回ボストン大学言語発達学会-

2019 年 11 月 7 日 (木) ~11 月 10 日 (日) ボストン (アメリカ)

国際コミュニケーション学部 島田 博行

#### 発表題目

The Agent-First Strategy and Word Order: Children's Comprehension of Right Dislocations and Clefts in Japanese

Hiroyuki Shimada, Yuko Masaki, Rika Okada, Akari Ohba, Kanako Ikeda, and Kyoko Yamakoshi



### 1. Boston University Conference on Language Development (BUCLD)

昨年と同様に 2019 年度も上記、第 44 回 Boston University Conference on Language Development (BUCLD)にて発表を行った。昨年参加した際にも述べたように(北陸大学紀要令和元年 9 月号に掲載)、上記の学会はアメリカのマサチューセッツ州ボストン大学で年に 1 度開かれる、第一言語獲得、第二言語獲得、あるいは失語症等、言語発達に関わる諸分野の専門家が世界中から集まる最も大きな国際学会の 1 つである。詳しくは上記紀要を参照されたい。

## 2. 本研究発表を経て

BUCLD44 では、『語順と右方移動構文の獲得：日本語を母語とする子供の分裂文と右方移動構文における動作主ストラテジー』というテーマで発表を行った。筆頭著者の私に加え、ハワイ大学大学院生の大庭明莉氏、お茶の水女子大学大学院生の岡田理加氏、池田佳菜子氏、お茶の水女子大学（現在卒業生）の政木裕子氏、お茶の水女子大学准教授の山腰京子先生との共同研究である。我々は言語獲得といっても理論言語学のアプローチをとっている。しかしながら、BUCLD 自体は決して理論言語学に特化したものではなく、心理学的アプローチなど、研究者の多様性もまた特筆すべき特徴の 1 つである。そのような中で、発表を行いながら、例えばカナダにある大学からいらした心理学のアプローチをとる先生よりコメント頂いたり、あるいは、同じく理論言語学の立場ではないけれどもフランスから来た研究者にフランス語での右方向移動構文について知見を頂いたりするなど、非常に大きな収穫があった。

前回の報告でも述べたことだが、やはりこういった現場でのある種のグローバルな視点のやりとりというのは、非常に有意義であり、価値の高いものであると思われる。特に、我々の研究分野における「言語学」とは科学であり、「1つの真実を追いかける」ということを目的とし、またそこに研究者は高揚感を覚える学問であるように思う。私の分野であれば、「子供がいかにして言語を獲得するのか（あるいはどういった知識を持っているのか）」という問いに対して、「1つの答え」を探し求めているわけである。このような学問は決して特定の個別言語を選ぶわけではなく、あらゆる言語に関して 1つの答えを導き出さなければならない、その意味において他の理論的アプローチであっても、あるいは他の言語の母語話者及び研究内容であっても、彼らと知見を交換することができるのは非常に有意義かつ価値のある時間であった。

## 3. 最後に

我々の分野は共同研究という手法をとることが非常に多い。その理由は研究アイデアの発案から実際の実験調査（とその準備）、分析に至るまで、非常にマンパワーを要するからである。欧米であれば言語獲得のラボがあることもあるが、日本の場合はおそらく言語獲得の専門家が複数人いる大学自体がおそらくほぼ存在しないのではないだろうか。そういった背景もあり、前回の研究と同様に、お茶の水女子大学の山腰先生とその学生の皆様と一緒に研究を行う形になった。この報告書を執筆するにあたり、共同研究に協力してくださった皆様にここでお礼を申し上げたい。

また、なによりこの度私に BUCLD での発表の機会をくださった本学関係者の皆様に、この場を借りて心からお礼を申し上げるとともに、本発表を通じて得られた知見を存分に活かし、今後の研究活動に繋げることをここにお約束したい。また、現在本稿を執筆中の 2020 年 6 月の段階において、今年イギリスで開かれる予定の国際学会 *Japanese/Korean Linguistics 28* にも口頭発表で採択された（新型コロナウイルスの問題からヴァーチャルで開催予定）。この新しい研究発表も、この BUCLD 44 で発表した内容に続く研究であり、今回の学会での学びが生かされた成果が残せたことを嬉しく思うとともに、この点に関しても改めて皆様方に感謝を申し上げたい。